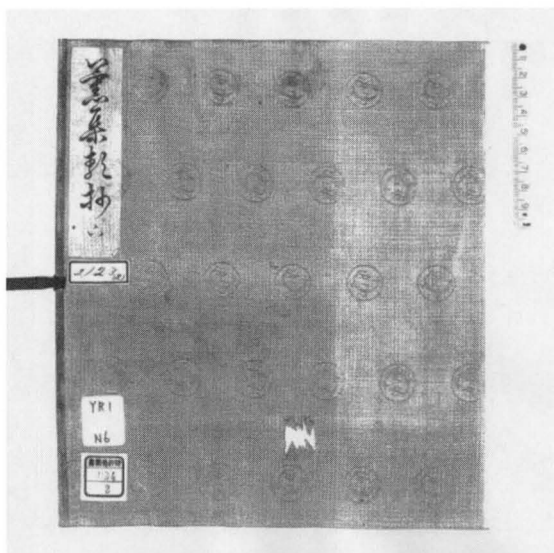


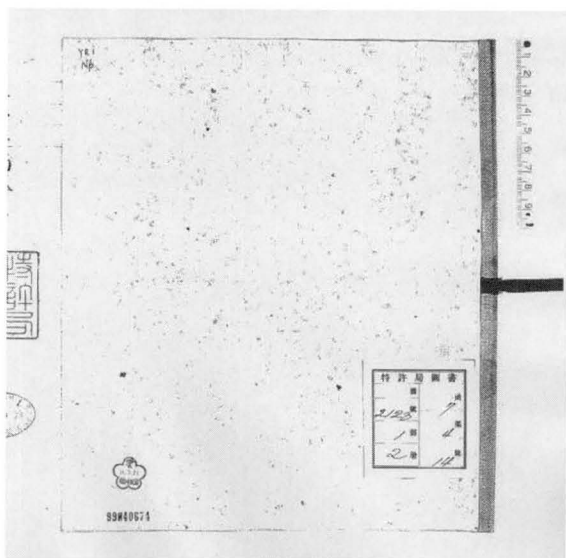
国立国会図書館所蔵『薰集類抄』影印と翻刻（下）

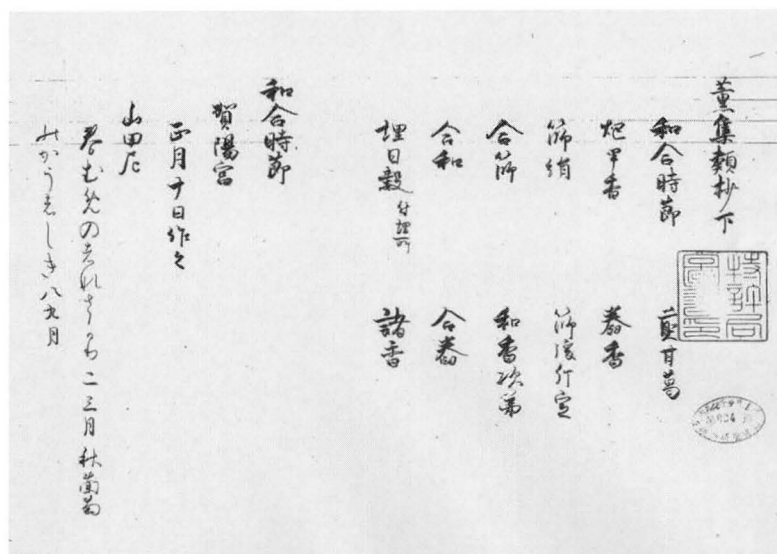
田 中 圭 子



薰集類抄 下

「外題・貼紙





薫集類抄下（特許局図書館蔵書印）（同 収蔵印）

和合時節 煎甘葛

炮甲香 春香

篩絹 篩後斤定

合篩 和香次第

合和 合春

埋日数<sup>付埋所</sup> 諸香

和合時節

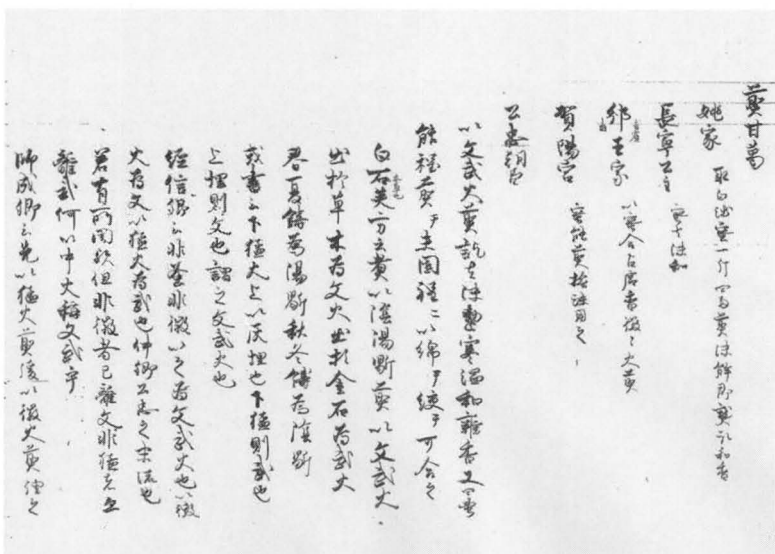
賀陽宮

正月十日作之

山田尼

春むめのはなさかり一三三秋蘭菊

のかうはしき八九月



煎甘葛

姚家

取白湯蜜一斤四兩煎沫能開熱取和香

長寧公主

蜜去沫和

鄒王家

以蜜合占湯香微々火煎

賀陽宮

蜜能煎湯用之

公忠朝臣

以文武火煎訖去沫整寒溫和雜香又曰蜜

能煎<sup>テ</sup>未固程<sup>ニ</sup>以綿<sup>テ</sup>絞<sup>テ</sup>可合之

白石英方云煮以陰陽鼎煎以文武火

出於草木為文火出於金石為武火

春夏鑄為陽鼎秋冬鑄為陰鼎

或書云下猛火上以灰埋也下猛則武也

上埋則文也謂之文武火也

經信卿云非蚤非微以之為文武火也以微

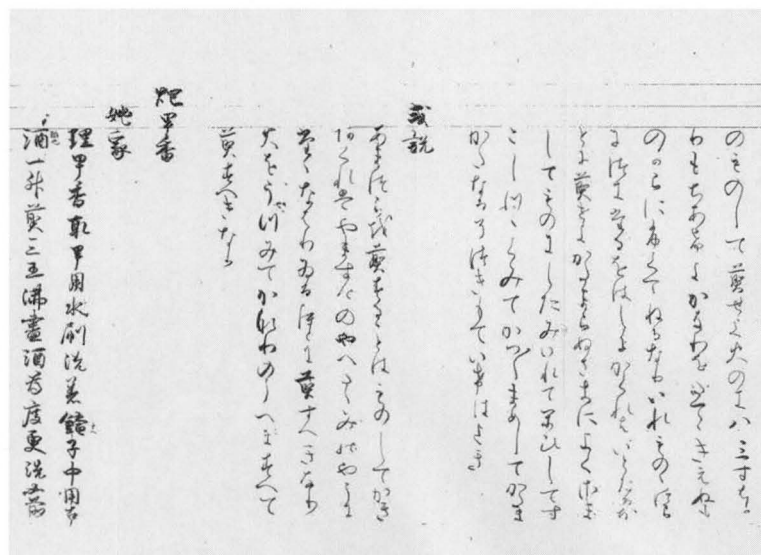
火為文以猛火為武也件卿公忠之末流也

若有所聞歟但非微者已離文非猛者亦

離武何以中火稱文武乎

師成卿云先以猛火煎後以微火煎謂之

文武火也件卿小一条大將濟時之孫也定有  
所聞歟  
雅忠朝臣勘文云文武之道也政理和則  
武道不興故煎練之處以熾為文武火  
歟（雅忠朝臣勘文）  
又云陰陽釜秋冬鑄為陰春夏鑄為陽  
或隨所出定陰陽以北方為陰以南方為陽  
以此釜葉其釜蓋謂之陰陽鼎  
居甑并覆蓋以之陰陽鼎  
八条宮凡重與千歲羹汁 混合用之  
八条大將以甘葛入甑子封口入湯三日許煎之如蜂蜜  
隨時朝臣和合蜜與千歲羹汁 混合用之  
國幹以蜜入土器中燒煙火居其上微火煎之沫立  
之後去之去以指深蜜過寒溫欲冷也熟則失  
香云々  
山田尼  
蜜はかうはしけれとむしのいてくる  
ときありあまつらはよしかなくさか  
らすさかくさからぬか蜜のことくかた  
からむを火よくうつみてしろか



のその一て剪せよ火のきは三寸はか  
りもちあけよかなわをたて、きえぬも  
のからにふくてねるなりいれもの、つら  
につきたるをはしにかくれはいとたるほ  
とに煎せよかたまらぬさきによくさま  
してものにしたみいれてかひしてす  
こしつゝくみてかつくまめしてかたき  
かたなるそつきもていけはよき

## 或説

あまつらを煎することはものしてかき  
あくれはやますけのやへたゝみのやうに  
たゝなはりあるほとに煎すへきなり  
火をうつみてかなわのうへにすへて  
煎すへきなり

## 肥甲香

## 地家

埋甲香取甲用水刷洗着鑑子中用古  
酒一升煎三五沸尽酒為度更洗如前

## 或説

ものして煎せよ火のきは三寸はか  
りもちあけよかなわをたて、きえぬも  
のからにふくてねるなりいれもの、つら  
につきたるをはしにかくれはいとたるほ  
とに煎せよかたまらぬさきによくさま  
してものにしたみいれてかひしてす  
こしつゝくみてかつくまめしてかたき  
かたなるそつきもていけはよき

## 炮甲香

## 姚家

埋甲香取甲用水刷洗着鑑子中用古  
酒一升煎三五沸尽酒為度更洗如前

了用酢煎盡酒為度亦用水洗如前  
和小許蜜熬令黃色云々  
唐僧長秀  
浸煖水經三日夜淨洗炮了又塗蜜重  
炮干取春  
賀陽宮  
甲香漬酒而一宿其後爆火搗之  
八条宮  
今日午時漬酒明日同時取上炙干調之  
典侍直子朝臣  
漬酒一宿後刷取後漬酢後亦洗水云々  
今只漬酒一宿後刷洗曝干塗蜜又炙干  
令黑黃  
公忠朝臣  
先漬古酒經一宿割去肉膜炙大唐及土左  
國經二宿云々炮訖塗蜜及黑黃干取細  
搗任用

了用酢煎盡酒為度亦用水洗如前  
和小許蜜熬令黃色云々  
唐僧長秀  
浸煖水經三日夜淨洗炮了又塗蜜重  
炮干取春  
賀陽宮  
甲香漬酒而一宿其後爆火搗之  
八条宮  
今日午時漬酒明日同時取上炙干調之  
典侍直子朝臣  
漬酒一宿後刷取後漬酢後亦洗水云々  
今只漬酒一宿後刷洗曝干塗蜜又炙干  
令黑黃  
公忠朝臣  
先漬古酒經一宿割去肉膜炙大唐及土左  
國經二宿云々炮訖塗蜜及黑黃干取細  
搗任用

隨時朝臣  
漬酒經一宿以清水洗和千歲蔓汁湯  
炙待朝搗肉今試一度以千歲蔓汁代  
蜜但推尋甚其意依蜜非好蓋相轉用乎

國幹  
擇厚深物漬美酒寒時經一宿溫時朝漬  
夕出也漬拭不削刷矣唯能割膜肉以蜜  
塗之以紙籠炮乾亦塗蜜蜜如此三  
度了取見甚中待黃脆析時取盡之

東三条院  
漬好酒經一夜之後以刀上ノ垢ヲ割落  
炮重々干離ヲ知ル

四條大納言  
塗甘葛煎若濃ハ入水テ頗薄ク成テ  
可塗之濃甘葛煎ヲ塗ハ甘葛煎浦ヲ  
早不被炙也只薄ノ塗カ吉也

隨時朝臣  
漬酒經一宿以清水洗和千歲蔓汁湯  
炙待朝搗用今試一度以千歲蔓汁代  
蜜但推尋甚其意依蜜非好蓋相轉用乎

國幹  
擇厚深物漬美酒寒時經一宿溫時朝漬  
夕出也漬拭不削刷矣唯能割膜肉以蜜  
塗之以紙籠炮乾亦塗蜜蜜如此三  
度了取見其中待黃脆析時取盡之

東三条院  
漬好酒經一夜之後以刀上ノ垢ヲ割落  
炮重々干離ヲ知ル

四條大納言  
塗甘葛煎若濃ハ入水テ頗薄ク成テ  
可塗之濃甘葛煎ヲ塗ハ甘葛煎浦ヲ  
早不被炙也只薄ノ塗カ吉也



## 山田

どきさけにひとよひたしてきたなき  
 ところなくよくはたけてあまつらの煎  
 せぬを名なしのゆひしてぬりて火をよ  
 くおこしてかきひろけてはひかきう  
 つみてこのめのこまかなるにひろけいれ  
 て三日はかりあふれあつきはおしわり  
 てあふるへしこかさぬものからよくこか  
 ねいろにあふれうすくてひろきはと  
 くあふらるあつきをよくあふりたるも  
 よし

## 又云

ひろくてうすきをよきにすあつきと  
 もいふまつあちはひよくすみたるさけ  
 にひたしてけふの午時にいれたらはあす  
 の午時にとりいつへしものこしのかひ  
 かう土左のくに、いてくるとはふたよひ  
 たすへしかたなしてうちのかたにつき  
 たるたなしこといふものをよくはた  
 くへしうらのいそすりはたゝものなど

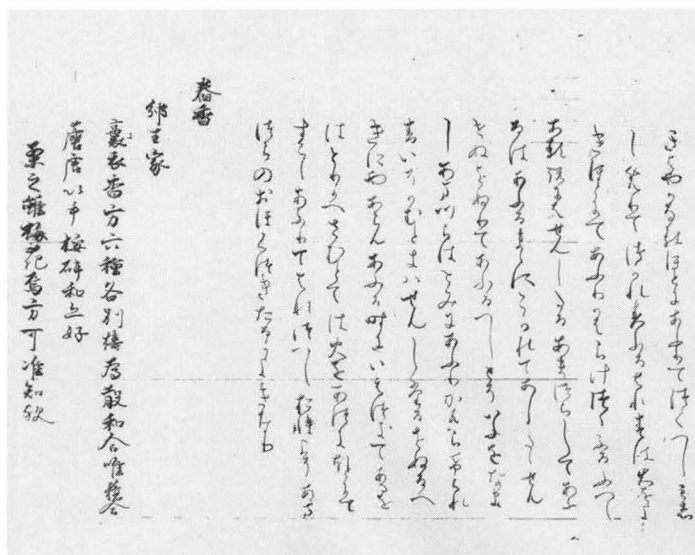
## 山田尼

よきさけにひとよひたしてきたなき  
 とくなくよくはたけてあまつらの煎  
 せぬを名なしのゆひしてぬりて火をよ  
 くおこしてかきひろけてはひかきう  
 つみてこのめのこまかなるにひろけいれ  
 て三日はかりあふれあつきはおしわり  
 てあふるへしこかさぬものからよくこか  
 ねいろにあふれうすくてひろきはと  
 くあふらるあつきをよくあふりたるも  
 よし

## 又云

ひろくてうすきをよきにすあつきと  
 もいふまつあちはひよくすみたるさけ  
 にひたしてけふの午時にいれたらはあす  
 の午時にとりいつへしものこしのかひ  
 かう土左のくに、いてくるとはふたよひ  
 たすへしかたなしてうちのかたにつき  
 たるたなしこといふものをよくはた  
 くへしうらのいそすりはたゝものなど





## 春香

卯王

裏衣香方六種各別搗為散和合唯蘇合

唐唐以手按碎和亦好

案之雖梅花烏方丁准知歟

春香はやはかなるほどにあふりてつくへしもし  
 しめりてつかれすふるはれすは火をよ  
 きほとにてあふりかはらけつ、ふるふへし  
 ある説にはせむしたるあまつらしてあふ  
 るはあふるまゝにこかれてあした、せむ  
 せぬをぬりてあふるへしとそいふをなま  
 しあまつらはとみにあふりかはらけられ  
 すいそかむときはせむしたるをぬるへ  
 きにやあらむあふる時にいえつきてあるを  
 はとりかへさむとは火をあつきほとにて  
 すこしあふりてはなつへしおほよそあま  
 つらのおほくつきたるかよきなり

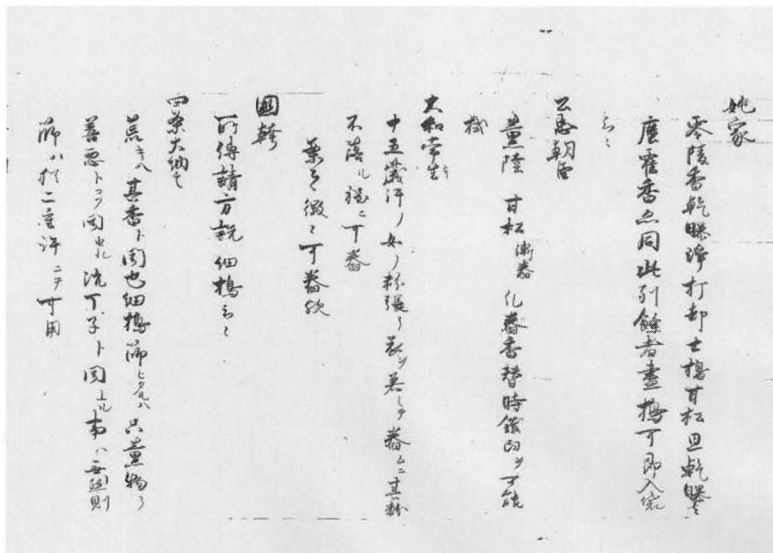
## 春香

卯王

裏衣香方六種各別搗為散和合唯蘇合

唐唐以手按碎和亦好

案之雖梅花烏方可准知歟



姚家

零陵香乾曝淨打却土搗甘松旦乾曝去

塵霍香亦同此別餘者盡搗丁入袋

云々

公忠朝臣

薰陸 甘松衛香 凡春香替時鉄白ヲ可能

拭

史和家

十五歲許ノ女ノ粉張ノ衣着シテ春ムニ其粉

不落ル程ニ可春

案之微々可春歟

國幹

所傳請方説細搗云々

四條大納言

荒キハ其香ト聞也細搗ビタルハ只薰物ノ

善惡トコソ聞 沈丁子ト聞 ヌル事無然則

飾ハ猶二重許ニテ可用

姚家

零陵香乾曝淨打却土搗甘松旦乾曝去

塵霍香亦同此別余者尽搗可即入袋

云々

公忠朝臣

薰陸 甘松衛香 凡春香替時鉄白ヲ可能

拭

大和常生ナリ

十五歲許ノ女ノ粉張ノ衣着シテ春ムニ其粉

不落ル程ニ可春

案之微々可春歟

國幹

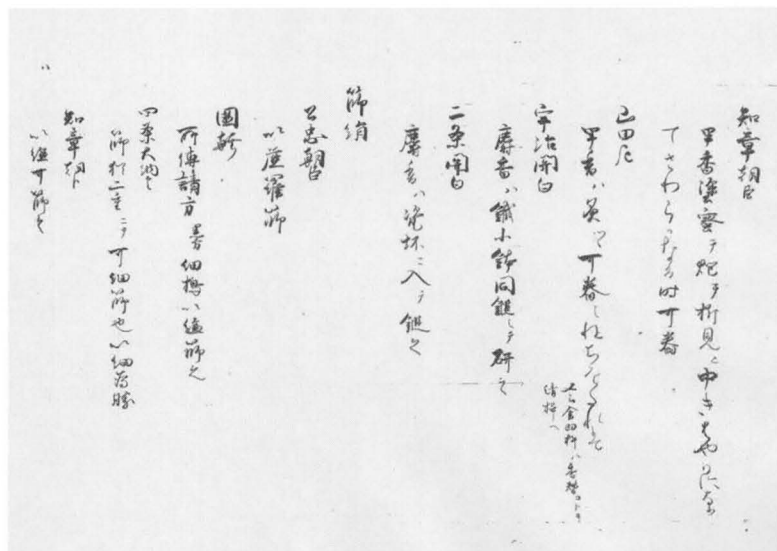
所伝請方説細搗云々

四條大納言

荒キハ其香ト聞也細搗ビタルハ只薰物ノ

善惡トコソ聞 沈丁子ト聞 ヌル事無然則

飾ハ猶二重許ニテ可用



知章朝臣

甲香塗蜜<sup>テ</sup>炮<sup>テ</sup>折見ニ中きはやかになり  
てさわらかなる時可春

山田尼

甲香炙<sup>ハ</sup>ツ、可春<sup>シ</sup>ねちけたれは

宇治関白

麝香<sup>ハ</sup>鉄小鉢同鉗<sup>シ</sup>碎之

二条関白

麝香<sup>ハ</sup>瓷杯<sup>ニ</sup>入<sup>テ</sup>鉗之

節絹

公忠朝臣

以鹿羅篩

国幹

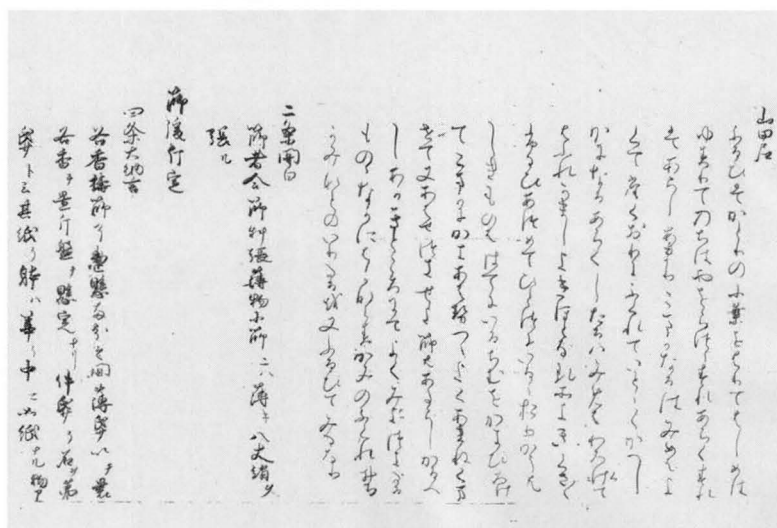
所伝請方<sup>黒方</sup>細搗以縑篩之

四条大納言

篩猶二重<sup>ニ</sup>可細篩也以細為勝

知章朝臣

以縑可篩之



## 山田尼

ふるひはかとりの小葉をはりてはしめは  
 ゆすりてのちはやをらつゝすれあらくすれ  
 はあらしあまりこまかなるはみめはよ  
 くてたくおりにふくれていとくかへし  
 かになるあらくしたるはみめはわろけて  
 はふれかましよきほとなるそよきくさく  
 ふるひあつめてひとつにいる、おりかうは  
 しきものはてにいるちむをかきひろけ  
 てこまにかきあはせつ、よくあまねくま  
 せて又あはせつきせよ篩はあたらしかるへ  
 しあかきところにてよくみよつきたる  
 もの、なかにはかならずかみのふくれおち  
 かみなとのいりたるを又ふるひてみるなり

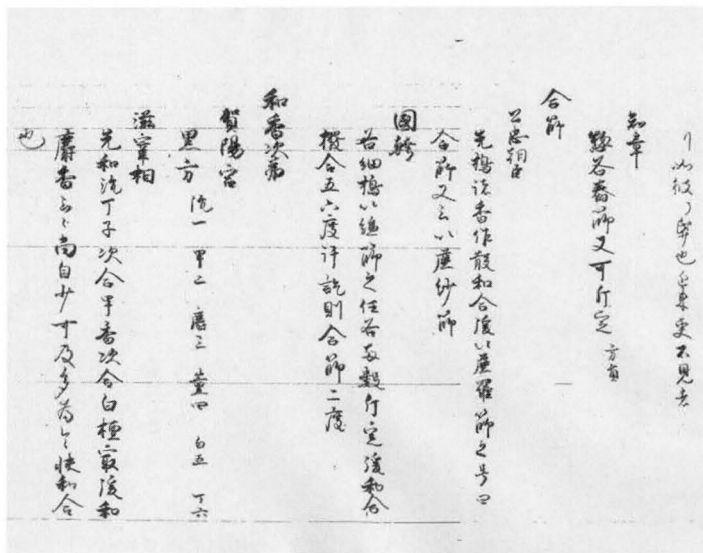
## 二条関白

篩者合篩打張薄物小篩二ハ薄キ八丈絹ヲ  
 張ル

## 篩後斤定

## 四条大納言

各香搗篩了整懸両分之間薄紙以テ裹  
 各香置斤盤懸定 件紙ナリ名草  
 紙ニ云其紙ハ体草ハ中ニ如紙ナル物ア



リ如彼ノ紙也近來更不見者  
知章  
惣各春飾又可斤定  
合飾  
公忠朝臣  
先搗諸香作散和合後以龜羅飾之号曰  
合飾又云以龜紗飾  
國幹  
各細搗以縑飾之任各兩數斤定後和合  
撥合五六度許訖則合飾二度  
和香次第  
賀陽宮  
黑方 沈 一 甲 二 麝 三 薰 四 白 五 丁 六  
滋宰相  
先和沈丁子次合甲香次合白檀最後和  
麝香云々尚自少可及多為令快和合  
也

源殿宮  
 諸香合蜜之後可和麝也 此說可秘云々  
 公忠朝臣  
 沈母次丁薰白ノアハヒニ麝香ハ合次  
 甲香又說蜜合了之上麝香振懸云々  
 蜜合了以手ニキル也加手成之普一ニ  
 振合為能  
 八条大將 承和秘方同之  
 沈甲麝薰白丁  
 朱雀院  
 沈丁甲薰麝  
 東三条院  
 沈甲白薰丁麝  
 四条大納言  
 合香次第只以兩數少物先入也又以兩數  
 均對々ニ合也但麝香ハ最後合之  
 小一条皇后  
 先沈丁子ヲ合次甲香ヲ合次白檀ヲ合終ニ  
 麝香薰陸ヲ合テ一度ニ合スト云リ少ヨリ  
 多ニ可及快ク為合也

染殿宮

諸香合蜜之後可和麝也

此說可秘云々

公忠朝臣

沈母次丁薰白ノアハヒニ麝香ハ合次

甲香又說蜜合了之上麝香振懸云々

蜜合了以手ニキル也加手成之普一々

振合為能

八条大將 承和秘方同之

沈甲麝薰白丁

朱雀院

沈丁甲薰麝

東三条院

沈甲白薰丁麝

四条大納言 云

合香次第只以兩數少物先入也又以兩數

均對々ニ合也但麝香ハ最後合之

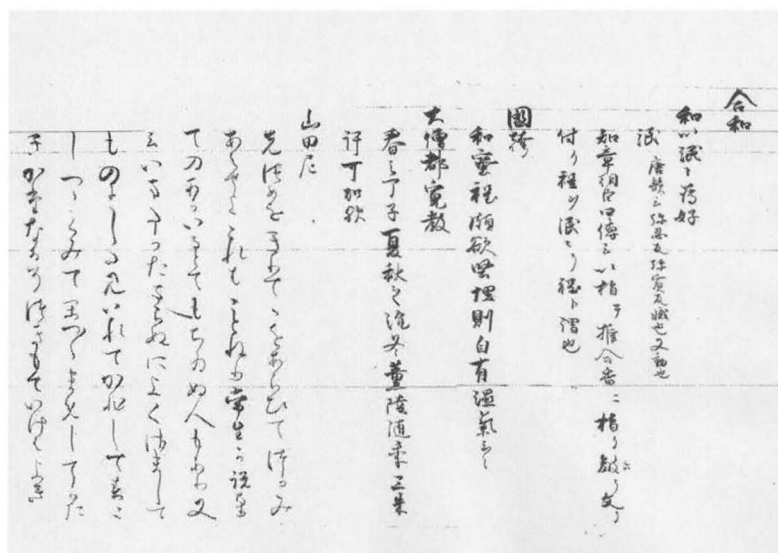
小一条皇后

先沈丁子ヲ合次甲香ヲ合次白檀ヲ合終ニ

麝香薰陸ヲ合テ一度ニ合スト云リ少ヨリ

多ニ可及快ク為合也





合和

和以泯々為好

泯 唐韻云弥忍反弥實反滅也又動也知章朝臣口伝云以指<sub>テ</sub>推合香<sub>ニ</sub>指<sub>ニ</sub>皴<sub>ノ</sub>文<sub>ノ</sub>付<sub>ク</sub>程<sub>ニ</sub>泯々<sub>ノ</sub>程<sub>ノ</sub>謂也

国幹

和蜜程頗欲堅埋則自有湿気云々

大僧都寛教

春之丁子夏秋之沈冬薰陸随季三朱

許可加歟

山田尼

先つめをきりて、をあらひてつかみ

あはせよこれはことねり常生か説なり

てのあかいるとてもちあぬ人もあり又

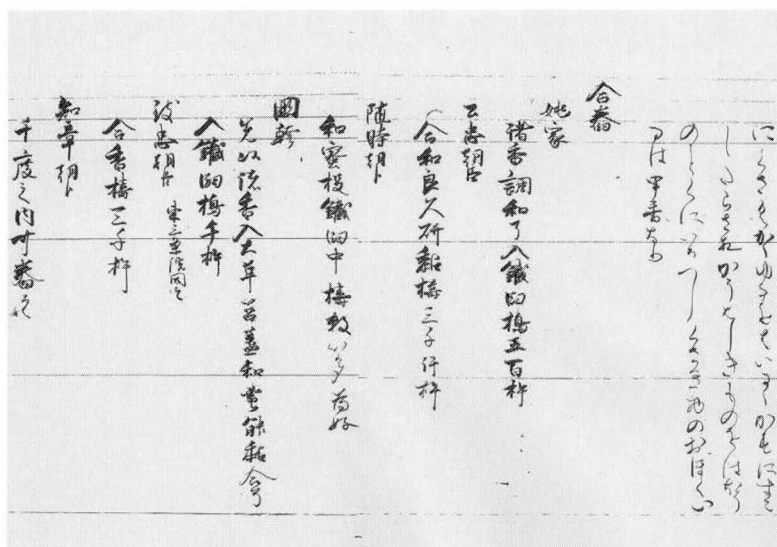
云いまたかたまらぬによくさまして

ものにしたみいれてかひしてすこ

しつゝくみてかつくまめしてかた

きかたなるそつきもていけはよき





## 合春

にくさくかゝゆるをはいるゝかすにすこ  
 したらさすかうはしきものをほほう  
 のことくにいるへしくさき物のおほくい  
 るは甲香なり

## 姚家

諸香調和了入鉄臼搗五百杵

## 公忠朝臣

合和良久研黏搗三千許杵

## 隨時朝臣

和蜜投鉄臼中搗數以多為好

## 国幹

先以諸香入大草筥蓋和蜜能黏合了

入鉄臼搗千杵

## 致忠朝臣

東三条院同之

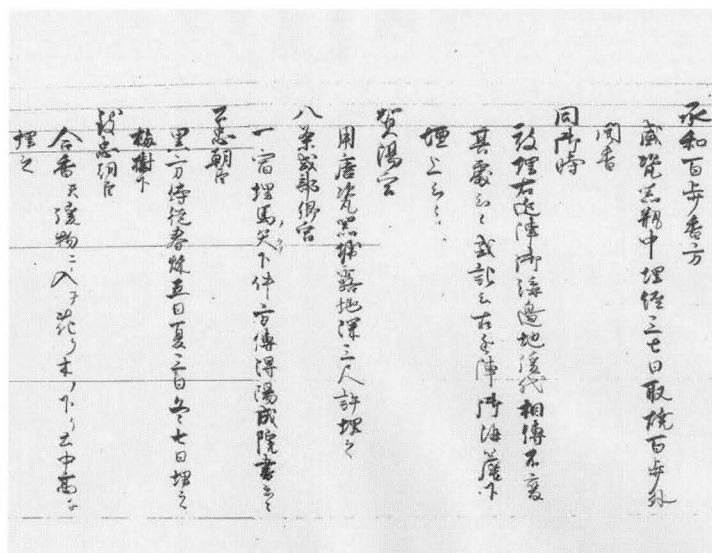
合香搗三千杵

## 知章朝臣

千度之内可春之

山田尼  
あはせつきのおりはかなうすきねよく  
あらふへし四両合には三千度二両合には  
千五百度一両合には千度もくねき  
はとくつかるれはかすをおとすなり  
しろきこはりきたるそてはこいりて  
あしのはりきたらん人のつくへき也  
埋日数 付埋所  
長寧公主  
埋三日  
姚家  
埋七日  
極要方  
盛白瓷中掘地三尺以上用水辺之地得  
朝陽埋之卅日  
洛陽薰衣香方  
入瓷器埋水邊陽氣地深八寸七箇日  
之後出用之

山田尼  
あはせつきのおりはかなうすきねよく  
あらふへし四両合には三千度二両合には  
千五百度一両合には千度すくなき  
はとくつかるれはかすをおとすなり  
しろきこはりきたるそてはこいりて  
あしのはりきたらん人のつくへき也  
埋日数 付埋所  
長寧公主  
埋三日  
姚家  
埋七日  
極要方  
盛白瓷中掘地三尺以上用水辺之地得  
朝陽埋之卅日  
洛陽薰衣香方  
入瓷器埋水邊陽氣地深八寸七箇日  
之後出用之



承和百歩香方

盛瓷器瓶中埋經三七日取焼百歩外

聞香

同御時

被埋右近陣御溝邊地後代相傳不變

其處云々或記云右近陣御溝簷下

壇上云々

賀陽宮

用唐瓷器堀露地深三尺許埋之

八条式部卿宮

一宿埋馬<sup>ノク</sup>矢下件方伝得陽成院書云々

公忠朝臣

黑方侍從春秋五日夏三日冬七日埋之

梅樹下

致忠朝臣

合香<sup>テ</sup>後物<sup>ニ</sup>入<sup>テ</sup>花<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>土中高<sup>ニ</sup>

埋之

知章朝臣  
五葉松下可埋春秋七日夏五日冬十日  
山田尼  
茶碗のつほもしはつきなとにいでてふ  
たよくおゝいてそくひしてかみを、し  
てよくみついるましく封して梅樹の  
もとにうつむへしそれあめなといりて  
なかる、もあしかりぬへし花の木のした  
のつちをものにかきいれてうつみたるいと  
よし又水のほとりみちのつしむまのや  
のなかにも、のにしたかひてうつむへし  
あるいは十日もしは廿日なとうつめくろ  
ほう梅花などは木のしたにうつみて  
春秋は五日夏は三日冬は七日ありてと  
うつむへしをほること二尺許なり  
諸香  
沈  
證類云置水中則沈故曰沈香次不沈者曰淺  
香似雞骨為雞骨香似馬蹄為馬蹄香枝  
條細實為青桂云々

諸香

沈

本草也

證類云置水中則沈故曰沈香次不沈者曰淺  
香似雞骨為雞骨香似馬蹄為馬蹄香枝  
條細實為青桂云々

知章朝臣

五葉松下可埋春秋七日夏五日冬十日

山田尼

茶碗のつほもしはつきなとにいでてふ  
たよくおゝいてそくひしてかみを、し  
てよくみついるましく封して梅樹の  
もとにうつむへしそれあめなといりて  
なかる、もあしかりぬへし花の木のした  
のつちをものにかきいれてうつみたるいと  
よし又水のほとりみちのつしむまのや  
のなかにも、のにしたかひてうつむへし  
あるいは十日もしは廿日なとうつめくろ  
ほう梅花などは木のしたにうつみて  
春秋は五日夏は三日冬は七日ありてと  
うつむへしをほること二尺許なり

数書曰此木出日南欲取富先研樹著地  
 積外皮自朽爛其心至堅者置水則沈在  
 沈香其次在心皮之間不甚堅置之水不沈  
 不浮与水平者名曰淺香其最小龜白者曰  
 麝香葉似冬青樹形崇竦  
 らむのうゝきひつそ、ちすのかす  
 二はきくのはなのかするゑくけれとよし  
 うしの矢のかするいとあしむけのをとり  
 はわらあくたのかすひとつ沈にもかた  
 かうはしきくさきかたあるをよくとり  
 まはしつゝ火にたきてみてよきかた  
 をわりとれ沈のわろきはいとあしきなり  
 くちたるところなどはたけすて、つく  
 へし  
 沈はくろくおもきをよきにす又くろ  
 くおもけれともわろきありすこしたき  
 て心みるへしいるへきかすにいま一二両許  
 くはへてつくへしかはのやうなるもの又  
 むしのすのやうにてちりはみたるもの  
 ましりたるをよくありてかたなしてこ  
 まかにわりくたきてつくへしいとよき

と一ち大いゝあひてよくもつかれす  
さらはわろき沈をすこしくはへてつ  
くへしかなうすにふたおほひてや  
をらつくへしふるふにもやをらふ  
るふへしすこしつゝふるひてあま  
た、ひつくへしまつふるひたるをよき  
にす

造沈香法  
先取香稻米一斗以六月上午日淨洗令炊入  
女菊六升和合之入水六升着一新甕中口封  
閉遇三其限瀝取其汁酢也以粟二升熬令黑也  
生胡藟粉中後  
之之即取入又作如前法也必至三度可用之  
然後取青桐木沈削去泥土令淨随多少着  
其酢封閉罈口埋土中不可令知其日可換  
汁至三度其後出青桐曝干了者亦別取  
新甕随木多少蜂蜜淹甕中随木厚薄  
可用蜜或三周或五周或七周也必成上品  
沈香也

生師口伝  
香稻和名  
香乃女菊和名加  
多知過三其限過三  
午也熬粟  
用伏  
久粟  
朝无  
出淹粟作酢必以初酢汁作之又以其  
汁重作如此至三度之後用之



又注  
香木一斤 沈香一斤 白檀一斤 藿香一斤  
梨蘆根一斤 香稻米酢三升 薑汁二升合  
鐵醬 大汁漬煮水沸之  
右一餅淨淹楓香木切以七種其入之  
口封閉土中埋之百日以東流水五升煎減  
四升入酢少々又返入一瓶以土封閉經三七  
日取出曝干而後隨木厚薄蜜中淹之若  
三周若五周若七周即成上品沈香也  
三七日 廿一日 曝干 同上 蜜中淹 欲過  
蜜邊有花形顯 薑汁 取之 鐵醬 以塩釜煮開  
若埋藏下欲常熱也輕一許取出見好是形如塊  
形脆破即取入水令吐塩氣如此數度常換水令冷溫  
淹用也與人豆汁平法淹和云也  
右二方唐僧長秀所秘藏也以方造進  
家之沈香其香甚好天曆十一年三月廿  
五日傳承之耳

又法

青桐木 藥体如何青桐但葉邊花形深大耳 不在不不不高大  
但根極細葉枝葉薄以杓老根極者為好其朽爛之  
中々至堅者為佳 埋土中 遇七八分許 至期也 其期也  
黑膠者為不佳  
換汁至三度 計如此三度換 經用出木 以紙數盛  
強乾上之 隨木厚薄 遇多耳 不可令知 其楚所  
除干

又法

桐香木一斤 沈香一兩 白檀一兩 藿香一兩  
梨蘆根一兩 香稻米酢三升 薑汁二升一合  
鐵醬 大汁漬煮水沸之  
右一瓶淨淹楓香木切以七種其入之  
口封閉土中埋之百日以東流水五升煎減  
四升入酢少々又返入一瓶以土封閉經三七  
日取出曝干而後隨木厚薄蜜中淹之若  
三周若五周若七周即成上品沈香也  
三七日 廿一日 曝干 同上 蜜中淹 欲過  
蜜邊有花形顯 薑汁 取之 鐵醬 以塩釜煮開  
若埋藏下欲常熱也輕一許取出見好是形如塊  
形脆破即取入水令吐塩氣如此數度常換水令冷溫  
淹用也與人豆汁平法淹和云也  
右二方唐僧長秀所秘藏也以方造進  
家之沈香其香甚好天曆十一年三月廿  
五日傳承之耳

丁子  
雷公炮炙論云丁子有雄雌雄類小雌類大  
似櫻葉核方中多使雌力大故膏煎中用雄  
若欲使雌須去丁蓋子々々發人背癰也  
試丁子法以齒嚙有音辛物是為上不然  
者朽古者也  
丁子とはさうやうな一むねにてさ  
やかなるをよきにすふるくなりたるも  
しはにてしるつかひたるはかるくて口  
く、み、るにからくもあらすあたらし  
くよきはく、み、るにからくていとかうはし  
花といひてまるなるものとくきとてく  
みたるものとはよきなりしろみても  
のすちのやうなる物ましりたるわろし  
えりすつへきなりこれもやをらつきてま  
つふるはれたらむをよきにすへしよき  
はさひたるやうにそある

白檀  
内典云梅檀白檀之白檀  
白檀名なりてさうなやうなさうな  
木はやらかにてかるくそあるうはか  
すこしけつりすて、つくへし

丁子  
雷公炮炙論云丁子有雄雌雄類小雌類大  
似櫻葉核方中多使雌力大故膏煎中用雄  
若欲使雌須去丁蓋子々々發人背癰也  
試丁子法以齒嚙有音辛物是為上不然  
者朽古者也  
丁子とはえたいとわるしおほきにてしと  
やかなるをよきにすふるくなりたるも  
しはにてしるつかひたるはかるくて口  
く、み、るにからくもあらすあたらし  
くよきはく、み、るにからくていとかうはし  
花といひてまるなるものとくきとてく  
みたるものとはよきなりしろみても  
のすちのやうなる物ましりたるわろし  
えりすつへきなりこれもやをらつきてま  
つふるはれたらむをよきにすへしよき  
はさひたるやうにそある

白檀  
内典云梅檀白檀之白檀  
白檀はかたくてきなるをよきにすわかき  
木はやらかにてかるくそあるうはか  
すこしけつりすて、つくへし

薰陸 一名膠香 一名白乳 一名乳頭香 一名乳頭香 一名乳頭香  
 本草云微温。風水毒腫去惡氣伏尸  
 其形如白膠出天竺單于二國一名乳頭  
 香一名滴乳香一名膠香一名白乳香一  
 名雲華一名沈油  
 ころくはにたるものおほかりよくみし  
 るへしわろきは乳頭といひてしろきもの  
 ましりたりよきはひかりきはみて  
 らふいろにそあるくろみたるものやいし  
 やなとましりたるをえりすて、つくへし  
 麝香  
 雷公炮炙論云麝香多有偽者不如不用  
 其香有三等一者名遺香是鹿子臍閉滿  
 其麝自於石上用蹄尖彈落者落処  
 一黑草木不生並燠 黃人若得此香價  
 明珠同也二名臍香採得堪用三名心結  
 香被大獸驚心破了因茲狂走雜諸群中  
 遂亂投水被人收得碎破見心々流在脾上結

薰陸

一名膠香 一名白乳 已上一名出  
 一名乳頭香 出金銀方 兼名流

本草云微温。風水毒腫去惡氣伏尸

其形如白膠出天竺單于二國一名乳頭

香一名滴乳香一名膠香一名白乳香一

名雲華一名沈油

ころくはにたるものおほかりよくみし

るへしわろきは乳頭といひてしろきもの

ましりたりよきはひかりきはみて

らふいろにそあるくろみたるものやいし

やなとましりたるをえりすて、つくへし

麝香

雷公炮炙論云麝香多有偽者不如不用

其香有三等一者名遺香是鹿子臍閉滿

其麝自於石上用蹄尖彈落者落処

一黑草木不生並燠 黃人若得此香價

明珠同也二名臍香採得堪用三名心結

香被大獸驚心破了因茲狂走雜諸群中

遂亂投水被人收得碎破見心々流在脾上結



とうにありては、  
一にをえて、  
かたにわさし、  
を正依  
ねちをさし、  
めをいさし、  
にむかひをさし、

磨糖香

本草之微溫其樹以槐矣然枝葉爲者  
似糖而黑者伏尸病出吏虐以角木爲  
安參別真偽者難得多以其皮及板裏  
唯輕者爲佳

せむらう大かゝーはのいゝゝてくれ  
 ーはのかたれやううてうもむらゝあ  
 るまけきーをの案ー和合ーてか  
 ーてててくこのあられきだか  
 けきーのーありんをわゝかゝゝい  
 るくはゝあゝゝ

寶金

嶺南者有實似山豈穀不堪噉之有青  
碧金又有熟碧金者其中有以五種名者  
（卷之八）又只此一特造之

をうつふせてところ／＼に火をおきてひさしからすしとりすて、すなはちあた、かなるわたにつ、みてこれをおさむれはかをます

ねちけたれはくろほうはさかういれす、  
めたるいとよし侍従はよくとておほくい  
れたるはなか／＼あし

簪糖香

本草云微溫其樹似橘矣煎枝葉爲香似糖而黑去伏尸病出交広以南又出晉安峯州真淳者難得多以其皮及柘虫矢唯輕者爲佳

せむたうはかたいしほのいろにてその  
しほのかはのやうにてうすひらにそあ  
るまつ煎したる蜜に和合してあはさ  
しとりてつくこの香はなはたかたし  
此香のなかにあかきけあるはかうはしい  
ろくろきは劣なり

鬱金

嶺南者有實似山荳蔻不堪噉之有青鬱金又有熟鬱金者其中有以五種香等造之又只以一種造之

蘇合香  
證類本草云中失竺國出蘇合是諸香  
汁煎之非自然一物也  
又云此香從西域及崑崙來紫赤色重  
密如燒之灰白者好師子矢者此是胡人  
雜言檢遺云師子矢赤黑色燒之去鬼氣  
蘇合色黃白二物相似而不用是西國草  
木皮汁所為胡人將來欲費人飭其名耳云々  
稽疑云似玉壺九年久者此色有赤脉胡  
人匿此法不言其術也云々

この香はさまざまあり熟鬱金といふは  
むらさきのりのくちたるやうにていとかう  
はしきなる鬱金はまろたちてする  
のみのいろなり青鬱金といふははし  
かみをほしたるさまにてわりたれ  
はきくちはのふかくつしみたる  
やうにそある

## 蘇合香

證類本草云中天竺國出蘇合是諸香  
汁煎之非自然一物也

又云此香從西域及崑崙來紫赤色重

密如燒之灰白者好師子矢者此是胡人

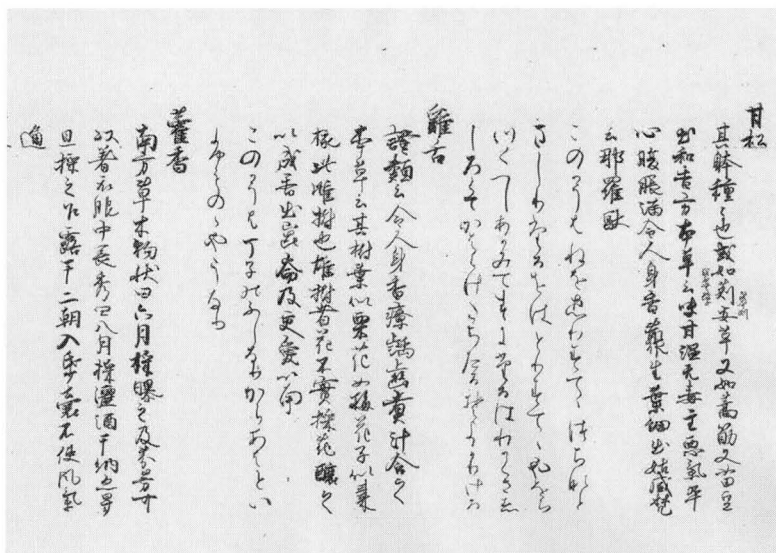
雜言拾遺云師子矢赤黑色燒之去鬼氣

蘇合色黃色二物相似而不用是西國草

木皮汁所為胡人將來欲費人飭其名耳云々

稽疑云似玉壺九年久者此色有赤脉胡

人匿此法不言其術也云々



甘松

其体種々也或如荊安草或本別字又如蒿筋又如田豆  
出和香方本草云味甘温无毒主恶氣平  
心腹脹滿令人身香或本別字叢生葉細出姑臧梵  
云那羅歇

雞舌

證類云令人身香療齒齕或本別字黃汁含之  
本草云其樹葉似栗花似梅花子似棗  
核此雌樹也雄樹者花不實採花釀之  
以成香出崑崙及交愛以南  
このうは丁子やめりあつとい  
ふものゝやうなり

藿香

南方草木物状曰六月採曝之及芬芳可  
以着衣服中長秀曰八月採灑酒于納亦早  
旦採之乍露于二朝入紙囊不使風氣  
通

甘松

其体種々也或如荊安草或本別字又如蒿筋又如田豆  
出和香方本草云味甘温无毒主恶氣平  
心腹脹滿令人身香或本別字叢生葉細出姑臧梵  
云那羅歇

雞舌

證類云令人身香療齒齕或本別字黃汁含之  
本草云其樹葉似栗花似梅花子似棗  
核此雌樹也雄樹者花不實採花釀之  
以成香出崑崙及交愛以南  
このうは丁子或本別字のふしなりからあはとい  
ふものゝやうなり

藿香

南方草木物状曰六月採曝之及芬芳可  
以着衣服中長秀曰八月採灑酒于納亦早  
旦採之乍露于二朝入紙囊不使風氣  
通

安息

本草云其味辛苦平无毒主心腹惡氣  
稽疑云安息香堅於石蜜者今案有云  
志香者是今安息香葉耳

けきくくすもの、かれはみてからきやう  
にそある

楓香脂

一名白膠香 五月新樹為炊  
十一月採脂

艾納

本草云其味甘温無毒去惡氣殺蟲  
松木皮上綠衣名艾納合香中用之取云々  
其形如太糸長四五寸許如蘭花干枯之物  
黏着其筋上方着松樹之蔦也今檢其  
說相似之云々

甲香

一名流螺南州異物志云可合衆香燒之便  
益芳獨燒之則臭

龍腦

本草云其味辛苦微寒出波律国形似白  
松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如  
雀矢者不佳云合梗灰相思子貯之不耗  
云々

安息

本草云其味辛苦平无毒主心腹惡氣  
稽疑云安息香堅於石蜜者今案有云  
悉香者是今安息香葉耳

此香はたきもの、かれはみてからきやう  
にそある

楓香脂

一名白膠香 五月新樹為炊  
十一月採脂

艾納

本草云其味甘温無毒去惡氣殺蟲  
松木皮上綠衣名艾納合香中用之取云々  
其形如太糸長四五寸許如蘭花干枯之物  
黏着其筋上方着松樹之蔦也今檢其  
說相似之云々

甲香

一名流螺南州異物志云可合衆香燒之便  
益芳獨燒之則臭

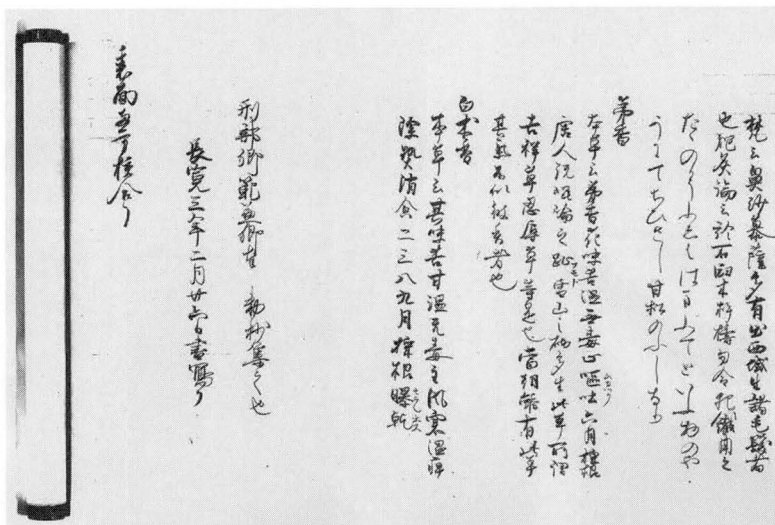
龍腦

本草云其味辛苦微寒出波律国形似白  
松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如  
雀矢者不佳云合梗灰相思子貯之不耗  
云々



青木香  
本草云味辛温无毒葉似羊蹄而長大  
花若菊其實黃黑  
白芷香  
本草云其味辛温无毒下性膏澤而脂潤  
澤顏色一名黃許慎反一名莞六九一名苳離一名沢芳  
一名芳香生河東川谷可沢二八月採根曝乾  
零陵香  
證類云味甘平无毒主惡氣心腹痛滿令体香  
和諸香作陽丸用之得酒良葉兩々相對莖方也  
桂心香  
陶云葉似柏非也其色紫色或謂之紫桂或  
云箇桂一名箇薰一名箇香一名葉使者其  
葉如柿葉中有縱文三道云々  
木蘭香  
本草云其味苦寒无毒去臭氣一名林蘭  
一名牡蘭皮似桂而香又生太山  
荳蔻香  
本草云窖荳蔻味辛温无毒去口臭氣出  
南海一名龍眼一名益智一名筠綠  
香附子

青木香  
本草云味辛温无毒葉似羊蹄而長大  
花若菊其實黃黑  
白芷香  
本草云其味辛温无毒可作膏澤面脂潤  
沢顏色一名黃許慎反一名莞六九一名苳離一名沢芳  
一名芳香生河東川谷可沢二八月採根曝乾  
零陵香  
證類云味甘平无毒主惡氣心腹痛滿令体香  
和諸香作陽丸用之得酒良葉兩々相對莖方也  
桂心香  
陶云葉似柏非也其色紫色或謂之紫桂或  
云箇桂一名箇薰一名箇香一名葉使者其  
葉如柿葉中有縱文三道云々  
木蘭香  
本草云其味苦寒无毒去臭氣一名林蘭  
一名牡蘭皮似桂而香又生太山  
荳蔻香  
本草云窖荳蔻味辛温无毒去口臭氣出  
南海一名龍眼一名益智一名筠綠  
香附子



梵云鼻沙慕薩多有出西域生諸毛髮者  
也炮炙論云於石臼木杵搗勿令犯鉄用之  
たのかうふしははまふてといふ物のや  
うにてちひさし甘松のふしなり

茅香

本草云茅香花味苦温无毒止嘔吐六月採根  
唐人說崑崙之趾雪山之砌多生此草所謂  
吉祥草忍辱草等是也當朝雖有此草  
其氣不似被香者也

白木香

本草云其味苦甘温无毒主風寒溫痺  
除熱消食二三八九月採根曝乾

刑部卿範兼卿奉 勅抄集之也

長寛三年二月廿六日書寫

表紙

梵云鼻沙慕薩多有出西域生諸毛髮者

也炮炙論云於石臼木杵搗勿令犯鉄用之

たのかうふしははまふてといふ物のや

うにてちひさし甘松のふしなり

茅香

本草云茅香花味苦温無毒止嘔吐六月採根

唐人說崑崙之趾雪山之砌多生此草所謂

吉祥草忍辱草等是也當朝雖有此草

其氣不似被香者也

白木香

本草云其味苦甘温无毒主風寒溫痺

除熱消食二三八九月採根曝乾

刑部卿範兼卿奉 勅抄集之也

長寛三年二月廿六日書寫了

裏面兩方校合了

## 【下巻裏書】

聖德太子傳曆云推古天皇三年卯乙春土左  
 南海夜有火光之有聲如雷經卅箇日矣  
 夏四月着淡路嶋南岸嶋人不知沈水以  
 交薪燒於竈太子遣使令獻其木大一捆  
 長八尺其香異薰太子觀而大悅奏曰是  
 為沈水香者也亦名梅檀香木生南天竺  
 國南海之岸夏月諸蛇相繞此木冷故也人以  
 矢射之冬月蛇蟄即折而採之其實鷄舌  
 其花丁子其脂薰陸沈水久者為沈香不  
 久者為淺香而今陛下興隆釈教肇造佛  
 像故釈梵感德漂送此木即有勅命百濟  
 工刻造檀像作觀音菩薩高數尺安置  
 吉野比蘇寺時々放光云々

## E

聖德太子伝曆云推古天皇三年卯乙春土左  
 南海夜有火光亦有聲如雷經卅箇日矣  
 夏四月着淡路嶋南岸嶋人不知沈水以  
 交薪燒於竈太子遣使令獻其木大一捆  
 長八尺其香異薰太子觀而大悅奏曰是  
 為沈水香者也亦名梅檀香木生南天竺  
 國南海之岸夏月諸蛇相繞此木冷故也人以  
 矢射之冬月蛇蟄即折而採之其實鷄舌  
 其花丁子其脂薰陸沈水久者為沈香不  
 久者為淺香而今陛下興隆釈教肇造佛  
 像故釈梵感德漂送此木即有勅命百濟  
 工刻造檀像作觀音菩薩高數尺安置  
 吉野比蘇寺時々放光云々

c

f

凡合香法管窺輩多稱其能然頗得其道者  
 公忠朝臣隨時稱臣也事忠者傳直子說稱雄  
 隨時者以八条李部王孫得名此兩人其流雖  
 同其派猶異口說相違手方相乖公忠先搗諸  
 香作散和合後以麝羅篩合麝々訖入煎蜜  
 更和合良久研黏取入鐵臼搗三千杵杵搗  
 了斤定和蜜欠數取出如丸入瓷壺埋七  
 日隨時止蒸法香和蜜了春無數以多為能  
 按此法亦公忠熟鬱金代用麝香隨時以黃  
 鬱金通用其說非一其論難定今見拾遺本  
 草隨時所陳々以相違亦大唐僧長秀云熟  
 鬱註本無此字檳榔鬱金花和白蜜所作之物也云々見此兩  
 種甚不同也非可通用之

合散之後出可飛風三時許

f

y

凡合香法管窺輩多稱其能然頗得其道者  
 公忠朝臣隨時朝臣等也公忠者伝典侍直子說稱雄  
 隨時者以八条李部王之孫得名此兩人其流雖  
 同其派猶異口說相違手方相乖公忠先搗諸  
 香作散和合後以麝羅篩合麝々訖入煎蜜  
 更。和合良久研黏取入鉄臼搗三千杵杵搗  
 了斤定和蜜欠數取出如丸入瓷壺埋七  
 日隨時亦春諸香和蜜了春無數以多為能  
 法如前  
 亦公忠熟鬱金代用麝香隨時以黃  
 鬱金通用其說非一其論難定今見拾遺本  
 草隨時所陳々以相違亦大唐僧長秀云熟  
 鬱註本無此字檳榔鬱金花和白蜜所作之物也云々見此兩  
 種其不同也非可通用之

J

合散之後出可飛風三時許

仰成卿云金白口<sup>三</sup>張檀紙<sup>テ</sup>杵<sup>ノ</sup>程<sup>二</sup>口<sup>一</sup>開  
 春<sup>ハ</sup>故実也但檀紙ハフクミテ其毛や入  
 らむ猶不快之説也以練絹可張歟如是事只  
 出自意略云々

劉夢得練甲香法

取濃米泔一斗半淨鑊以微糠火煮經一伏時  
 即換新泔經三度即漉出泉平割去甲上  
 惡物乾用白蜜三合水一斗後煮都三伏  
 時以香軟爛即止炭火燒令熱即灑清酒令  
 潤鋪甲地上以故帛於其上以盆合上蜜  
 泥一伏時待甲冷硬即取木臼杵搗令爛  
 即入沈香二分麝香二分和合搗令入龍良  
 香成以瓷瓶貯之佳更能埋經久燒尤好  
 即燒此香須用火炉傍悉煖水即香氣  
 不散矣云々甲香出南方大如甌長數寸可  
 合衆香燒之皆使益芳獨燒則臭一名流  
 螺矣

K

師成卿云金白口<sup>三</sup>張檀紙<sup>テ</sup>杵<sup>ノ</sup>程<sup>二</sup>口<sup>一</sup>開  
 春<sup>ハ</sup>故実也但檀紙ハフクミテ其毛や入  
 らむ猶不快之説也以練絹可張歟如是事只  
 出自意略云々

G 劉夢得練甲香法曰

取濃米泔一斗半淨鑊以微糠火煮經一伏時  
 即換新泔經三度即漉出泉平割去甲上  
 惡物乾用白蜜三合水一斗後煮都三伏  
 時以香軟爛即止炭火燒令熱即灑清酒令  
 潤鋪甲地上以故帛於其上以盆合上蜜  
 泥一伏時待甲冷硬即取木臼杵搗令爛  
 即入沈香二分麝香二分和合搗令入龍良  
 香成以瓷瓶貯之佳更能埋經久燒尤好  
 即燒此香須用火炉傍悉煖水即香氣  
 不散矣云々甲香出南方大如甌長數寸可  
 合衆香燒之皆使益芳獨燒則臭一名流  
 螺矣

蓋雖抄云承保三年九月十四日前少納言清房來予  
 相談之身病種々療治未得其驗者清房答云采  
 女正惟宗俊通醫道才人也我病為被療治已得  
 平愈者忽同乘到俊通家五条鞍負西最角  
 也先入前納暫云依病不出門外之由以下人云出仍稅  
 駕到会着布直衣蟬臥遣戸内家体三問許  
 立文机文書甚多以竹作籠子備之急時速  
 為取出所構云々又入鼓筒等問種々療治所答似  
 有才智次問文武火陰陽釜答曰白石英方所云  
 如此者余答云件方無此事只春夏鑄為陽釜  
 以秋冬鑄為陰釜又以採木為文火以採金石為武  
 火者俊通答云更不見此文但可勘送者俊通誤  
 得人心見慥文之後可被信也  
 同廿七日重問俊通其返狀云仰旨跪奉之抑陰陽  
 釜凡煮藥其釜覆蓋謂之陰陽鼎練以文武火  
 凡練藥始用猛火謂之武火次以微火謂之文火非  
 猛非微謂之文武火研以玉槌者也水精和以左味之  
 津以能酢和之也或說服以乳牛之糜者也水精和以左味之

## I

薰炳抄云承保三年九月十四日前少納言清房來予  
 相談云身病種々療治未得其驗者清房答云采  
 女正惟宗俊通醫道才人也我病為被療治已得  
 平愈者忽同乘到俊通家五条鞍負西最角  
 也先入前納暫云依病不出門外之由以下人云出仍稅  
 駕到会着布直衣蟬臥遣戸内家体三問許  
 立文机文書甚多以竹作籠子備之急時速  
 為取出所構云々又入鼓筒等問種々療治所答似  
 有才智次問文武火陰陽釜答曰白石英方所云  
 如此之面在者余答云件方無此事只春夏鑄為陽釜  
 以秋冬鑄為陰釜又以採木為文火以採金石為武  
 火者俊通答云更不見此文但可勘送者俊通說未  
 得心見慥文之後可被信也  
 同廿七日重問俊通其返狀云仰旨跪奉之抑陰陽  
 釜凡煮藥其釜覆蓋謂之陰陽鼎練以文武火  
 凡練藥始用猛火謂之武火次以微火謂之文火非  
 猛非微謂之文武火研以玉槌者也水精和以左味之  
 津以能酢和之也或說服以乳牛之糜者也水精和以左味之

## 『薫集類抄』以前——先行する散逸薫物書との関係——

## 序

複数の香藥から成る薫物の処方や調合の説を載録した典籍（以下「薫物書」と称す）の、わが国における起源や生成過程については明らかでないが、平忠盛家ゆかりの人物による奥書識語を伝える「香之書」<sup>（注1）</sup>には長寛二年（1164）の、院政期に藤原範兼が勅により抄集したとされる『薫集類抄』には長寛三年（1165）の識語が見え、長寛年間には薫物書の書写編纂といった活動が比較的盛んに行われていたものと推察される。前者の出典については別稿で論じる予定であり、<sup>（注2）</sup>後者の出典は本文と裏書勘物に残る書目のみを索引という形で示した事がある。<sup>（注3）</sup>こうした出典のうち、和書は散逸して伝わらない場合が殆どであるが、その逸文の内容は、宫廷社会における薫物書の編纂が、長寛年間よりかなり以前から行われていた可能性を窺わせる。ここでは、『薫集類抄』の出典と思しき先行する薫物書の一部について、逸文の内容や特徴、原本の成立につき小考を試みる。

## 一 「陽成院書」

『薫集類抄』下巻「埋日数」項には、仁明天皇皇子八条式部卿本康親王ゆかりの合香秘説が、次のように載録されている。

八条式部卿 一宿埋馬矢下件方伝得陽成院書云々

(334, 335行)<sup>(注4)</sup>

(八条式部卿 一宿、馬矢の下に埋む。件方、陽成院書に伝へ得たり云々。)

(以下で行う丸括弧内の訓読は、諸本の訓点を参考にした)  
「八条式部卿の説によれば、(薫物の材料は混ぜ合わせられた後に)一晚馬糞の下に埋める、この方は「陽成院書」に伝えられた、云々」と解せようか。「陽成院書」は、清和天皇第一皇子の陽成天皇が編纂した薫物書を意味すると考えられるが、現在は伝わらない。「薫集類抄」編者も「陽成院書」そのものを見たわけではなさそうである。「陽成院書」は、「薫集類抄」が成立したとされる院政期には、既に散逸していたのかもしれない。

陽成天皇は元慶元年(877)正月三日、十歳で即位し、同六年(882)正月二日、十五歳の年に元服するも、わずか二年後の同八年(884)二月四日に遜位した。和歌文学活動に力を入れていたらしく、延喜十二年(912)ないし十三年(913)夏の開催と推定される陽成院歌合、ならびに同十三年九月九日陽成院歌合を主催したとされるほか、「後撰和歌集」卷十一恋歌三に「つくはねの峯よりおつるみな(注5)の川恋そつもりて淵と成ける」の和歌が入集している。村上朝の天暦三年(949)九月二十一日、不予により出家し、八日後の二十九日に崩御、八十一歳であつた。

『薫集類抄』が載録する陽成天皇関係の説は、前掲の一点のみだが、長寛二年(1164)の年号を奥書に伝える「香之書」は、この帝の尊号を冠した左記の薫物処方を載録する。

陽成院方黒方

「沈四両一分 薫陸一分 白檀一分 丁子二分 甲香一両 麝香一分四朱

「陽成院方黒方」とは、陽成天皇が所有しないし考案した「黒方」という種類の薫物の処方を意味する。なお、同じ



処方 は建長四年（1252）十月十六日の書写者識語を伝える薫物書「焼物調合法」<sup>（注6）</sup>のほか、鎌倉末期の延慶三年（1310）、正和三年（1314）書写者識語を伝える薫物書「薫物方」<sup>（注7）</sup>にも載録される。

『本朝世紀』天慶四年（941）十二月五日条によれば、陽成上皇は螺鈿の大床子と椅子、螺鈿置物の机という、仁明朝以来の累代の宝物を宮中に納めている。<sup>（注8）</sup>本康親王の薫物秘説もそうした相統と併行して継承され、「陽成院書」に書き留められたのかもしれない。

## 二 「薫炉方」

康平四年（1061）以後に、密家の素養を備えた複数名の公家の学士により撰集されたと見られる「香字抄」や、亮阿闍梨兼意（延久四1072?）編纂と目される「香要抄」といった類書形式の香薬字書は、<sup>（注9）</sup>大唐僧長秀なる人物が勧進したと云う「造熟罽金法」、香薬の熟罽金を調製するための処方<sup>（注10）</sup>を載録する。

### 造熟罽金法

大唐僧長秀所勧進也

黄罽金小十両

麝香小七両

沈香小七両

紫檀小十両四分

唐青木小七両

右五物擣篩和合暖納之瑠璃壺

（天理図書館蔵「香要抄」本）<sup>（注10）</sup>

右の法には、「黄罽金」なる罽金香の一種らしき香薬が処方される。「香字抄」には、「又有青罽金黄罽金」と右の法に続けて記されるのみで、この香薬の勘物は見えない。一方で、後代に成立した「香要抄」は、紙背に左記の「薫炉方説」を書き留めている。

薫炉方説

山田尼云

熟鬱金<sup>ハ</sup> 紫苔ノ朽タル様也

黄鬱金<sup>ハ</sup> マロウチテスロノミノイロナリ

青鬱金<sup>ハ</sup>

そまはしきみをしたるさまなり□□(竊者注) □は不明な文字 たれはきりくちはふかくてしみたるかこくあり

(天理図書館蔵「香要抄」本 前掲「造熟鬱金法」裏書)<sup>(注1)</sup>

『香要抄』裏書では、熟鬱金については漢文体で、黄鬱金は片仮名、青鬱金は平仮名でそれぞれ勘物が行われ、いずれも山田尼説として示されている。「薰炉方」は、薰炉の使用やそこで薫き匂わされる香薬、薰物に係る諸説から成る典籍と見られるが、伝存しない。

この山田尼説の同文が、『薰集類抄』下巻にも引かれている。

この香はさまくあり熟鬱金といふはむらさきのりのくちたるやうにていとかうはしきなる鬱金はまろたちてするのみのいろなり青鬱金といふははしかみをほしたるさまにてわりたれはきくちはのふかくつしみたるやうにある

(507～513行)

(この香はさまざまあり。熟鬱金といふは紫苔の朽ちたる様にていと香はし。黄なる鬱金は、まろだちて棕櫚の実の色なり。青鬱金といふは、ハジカミを干したるさまにて、割りたれば黄朽葉の深くつしみたるやうにぞある。)

(句読点、濁点は稿者が施し、漢字表記は諸本の注記を参考にした)

ここでは、「熟鬱金」「黄鬱金」「青鬱金」についての各説を、表記と文脈が統一された形で採録している。『香要抄』の場合と異なり、山田尼の説である旨は明記されないが、その可能性は検討に価する。なお、『薰集類抄』上下巻に載録の仮名書きの説は、おおよそ山田尼説として伝わる。また、『薰集類抄』神宮文庫本下巻には、考案者の明記されない下巻「諸香」項の仮名書きの説について、山田尼説の可能性を指摘した頭書がある。<sup>(注12)</sup>

『蕉集類抄』上巻は、山田尼について、『後拾遺和歌集』巻十哀傷に「そなはれし玉の小櫛をさしながらあはれかなしき秋にあひぬる」の和歌が入集する小一条皇后藤原城子侍女山田中務と同一人物として伝える。<sup>(注13)</sup>山田尼説を載録した『香要抄』諸本のうち、最古写本と目される天理図書館蔵『香要抄』は、平安末期の十二世紀ごろの書写と推定される。<sup>(注14)</sup>本文と当該裏書物は筆跡のよく似た人物により行われており、よつてこの勘物の典拠とされる「蕉炉方」は、天理図書館蔵本が作成される以前に成立していた可能性がある。

### 三 「蕉炉抄」

『蕉集類抄』下巻、「煎甘葛」項の紙背には、承保三年（1076）九月十四日と同二十七日の日付で行われたとされる左記の記事が引かれている。

蕉炉抄云、承保三年九月十四日、前少納言清房来、予相談云、身病種々療治未得其驗者、清房答云、采女正惟宗俊通、医道才人也、我病為被療治、已得平愈者、忽同乘到俊通家、五条鞠原西最角也、先入前納、暫云、依病不出門外之由、以三人云出、仍税駕到会、着布直衣、蟬臥遣戸内、家体三間許、立文机、文書甚多、以竹作籠子備之、急時速為取出所（稿者注・「所」の字は「否」・「岩」の文に「取」に作る）構云々、又入鼓筒等問種々療治所答似有才知、次（稿者注・「次」の字は「否」・「岩」の文に「以」に作る）問文武火・陰陽釜、答曰、白石英方所云如之<sup>面在</sup>者、余答云、件方無此事、只春夏鑄為陽釜、以（稿者注・「面」の文に「以」の字ナシ）秋冬鑄為陰釜、又以採木（稿者注・「以採木」は「面」の文に「出於草木」に作る）為文火、以採金石（稿者注・「以採金石」は「面」の文に「出於金石」に作る）為武火者、俊通答云、更不見

此文「但可<sub>レ</sub>勸送<sub>二</sub>者、俊通説未<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>心、見<sub>二</sub>髓文<sub>一</sub>之後可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>信也、

同廿七日重問「俊通其返状云、仰旨、跪奉<sub>レ</sub>之、抑陰陽釜凡煮<sub>二</sub>藥其釜、覆<sub>レ</sub>蓋謂<sub>二</sub>之陰陽鼎<sub>一</sub>、練以<sub>二</sub>文武火<sub>一</sub>凡練<sub>レ</sub>

藥始用<sub>レ</sub>猛火謂<sub>二</sub>之武火<sub>一</sub>、次以<sub>二</sub>微火謂<sub>二</sub>之文火<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>猛非<sub>レ</sub>微謂<sub>二</sub>之文武火<sub>一</sub>、研以<sub>二</sub>玉槌<sub>一</sub>者、也即本槌和以<sub>二</sub>左味之

津<sub>一</sub>、以能解和之也、或説、以能解左味<sub>一</sub>、服以<sub>二</sub>乳牛之糜者、謂、膏煎、云粥也、裏書勸物<sub>一</sub>。白文の訓点と読点は諸本の書き入れを参考に施した。

〔杏〕は武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の江戸期写本、〔岩〕は関西大学図書館岩崎美隆文庫所蔵の一本、〔面〕は翻刻22

「24行の「白石英方」説を指す」

〔薰炉抄〕に云はく、承保三年九月十四日、前少納言清房来る。予、相談ふて云はく、身は病みて種々療治しけるも未だその験を得ずてへり。清房答へて云はく、采女正惟宗俊通、医道の才人也。我病みて療治せられたる已に平癒を得るてへり。忽ち同乗して俊通家に到る。五条朝貞西最角也。まず前納を入れる。暫しありて云ふ。病に依りて門外に出でざるの由、下人を以て云ひ出す。仍りて駕をおきて到会するに、布の直衣を着て遣戸の内に蟻臥す。家の体は三間許、文机を立て文書甚だ多し。竹を以て籠子を作りて之を備ふ。急時速やかに取出して、取構へんが為と云々。又、鼓筒等に入る。種々の療治を問ひたるに、答ふる所、才知有るに似たり。以て文武火・陰陽釜につきて問ふ。答へて曰く、『白石英方』に云ふ所、之の如してへりへ割注・在面。余、答へて云はく、件の方、此事無し、只春夏に鑄るを陽釜と為し、以て秋冬に鑄るを陰釜と為す、又、木より採るを以て文火と為し、金石より採るを以て武火と為すてへり。俊通答へて曰く、更に此の文を見ず、但し勸送すべしてへり。俊通が説、未だ心得ず、慥かなる文を見ての後に信ぜらるべき也。

同廿七日、重ねて俊通に問ふに、その返状に云はく、仰の旨、跪きて之を奉ず、抑（そもそも）、陰陽釜は凡そ藥を煮るに、その釜に蓋を覆ふ、これを陰陽鼎と謂ふ、練るに文武火を以てすとは、凡そ藥を練るに、始め猛火

を用ふ、これを武火と謂ふ、次に微火を以てす、これを文火と謂ふ、猛に非ず微に非ず、これを文武火と謂ふ、研くに玉槌を以てすてへり（割注・水精の如き也）。和すに左味之津を以てし（割注・よき酢を以て之を和す也、或説に唾を以て左味と爲す）、服するに乳牛の麋をもつてすてへり（割注・へ音ノ靡、唐韻、粥を云ふ也。）。

承保三年（1076）九月十四日記事は、「余」こと筆者の許に「前少納言清房」が訪れた際、筆者が病氣の治療経過のはかばかしい旨を訴えたところ、清房から「采女正惟宗俊通」なる「医道之才人」の評判を聞かされ、早速連れ立って俊通家へ向かうところから始まる。

清房は、宇多源氏雅信曾孫で経頼一男の少納言従四位下清房（注16）であろう。清房の生没年は明らかでないが、康平三年（1060）に六十六歳で薨じた従兄弟の参議従二位資通（注17）と同年輩であつたとすれば、承保三年には七十歳前後の高齡と推察される。

この清房が療治の手腕を讃えた俊通は、「官職秘抄」の「医博士」、「侍医」両条に優れた医師として名前のおがる、侍医従五位下采女正惟宗俊通に比定される。俊通の生没年は明らかでないが、「帥記」「水左記」承暦四年（1080）閏八月五日以降の記事に名前が見える。両書によれば、この頃の朝廷では、高麗国から商客を介してわが国に疫病治療のための医師派遣を要請する牒状が届けられた、いわゆる医師要請事件に係る討議が行われていた。（注18）五日の朝議で典藥守丹波雅忠と雅忠子息忠康、俊通の三名が派遣医師の候補にあげられたが、その中で、雅忠は「道之宗匠、朝之簡要」（前巻）、わが国の医道の宗匠であつて、本朝にとって不可欠な存在と評され、続いて子息忠康については「累代名家門業相伝」、代々医道を業とする名家の後継者であり、俊通は「道已為宿老」、医術の道に熟達した者と評されている。朝廷は、雅忠に次ぐ医師として、忠康と俊通に信望を寄せていたと理解される。なお、雅忠のような名医を遠方へ派遣するのは最も憚られるという理由から、残る二人のいずれかを派遣する案も検討されている。

十四日の朝議の結果、雅忠を派遣候補から除いた上で、残る候補の人選につき雅忠の意見を求めることになった。二十二日に雅忠が回答したところによると、まず高麗への医師派遣には先例が無く、そもそも商客の携えてきた牒状に依じて医師を派遣すべきではない、敢えて派遣すると云うなら俊通が高麗へ向かうべきであろうか、二人一組で派遣すると、俊通は恐らく相手と仲たがいをするであろう、これみな衆人の知る所である、と云う。

後継ぎの忠康を疫病の蔓延する外国へ遣られたくない一心でそのように答えたのかもしれないが、いずれにしても、俊通は少々気難しい人物として知られていたようである。『統古事談』は、この俊通の暮らしぶりや行動について、次のように伝えている。

采女正俊通ト云医師アリケリ。七十余ニテ、ヌノ、ナラシニ、ムラサキノサシヌキヲキテ、人ニアヒケリ。

(第五 諸道 第125段)  
(注20)

小林直樹氏は、第136段に「昔ハ諸道ノ博士ナドハ装束執スル事ナカリケルニヤ」とされる事を引き、「世間の常識には無頓着な、学究タイプの人間として俊通は遇されているものと見たい。」と評している。(注21) 布の直衣のような粗略な衣装を身に着け客人に面会すると云う奇行については、「薰炉抄」逸文にも書き留められていた。俊通の風評が説話として確立されて行く過程において、「薰炉抄」逸文が関わっているかもしれない。

「薰炉抄」逸文は、『薰集類抄』下巻「煎甘葛」項の「公忠朝臣」こと源公忠説に見える「文武火」云々につき注解する意味で付されたと思しき、「白石英方」(注22) 説の紙背に伝存していた。逸文のおおよその内容は、香葉を調製する際の「文武」の火加減や、釜と鼎の「陰陽」の別について、筆者と俊通との間で交わされた問答の経緯を書き留めたものである。九月十四日条に「白石英方」に云ふ所、之の如しと(割注・在面)。」と見える。「在面」の「面」は『薰集類抄』本文を指すものと考えられる。

『薫集類抄』上巻末に「裏面共校合了」、下巻末に「裏面両方校合了」と見えることから、「長寛三年二月廿六日」に書写を終えたとされる際、底本には既に『薫集類抄』裏書勘物が存していたと解せる。なお、元弘年間の日付を伴う書き入れが多数伝存し、鎌倉期写本と鑑定される、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の古鈔本は、上巻から倭人の処方を中心に抄出して成る再編本であるが、国立国会図書館本の紙背に同じく四項目の裏書勘物を伝えている。<sup>註23</sup>「薫抄」成立の問題と併せ、裏書勘物各項目の執筆時期の確定につながるような古鈔本や資料の発見が待たれる。

## 結

長寛年間の書写者識語を伝える「香之書」や『薫集類抄』以前にも、陽成天皇宸筆の可能性を窺わせる「陽成院書」、薫物名家山田尼の香薬に関する秘説を載録する「薫炉方」、承保三年に某と医師惟宗俊通が交わした香薬の調製方についての問答を引く「薫炉抄」といった薫物書が編纂されたらしい。いずれも逸文を遺すのみで、完全な形では伝わっていないが、院政期以降に成立したとされる香薬字書や説話集に同文や類話が載録されていた。こうした同時代の他書と『薫集類抄』との成立上の関連性の有無については検討を要す。

院政期以前の宮廷社会における薫物秘説の記録や伝授の実態、既存の薫物書の源泉を明らかにする為には、こうした逸文の研究や探索が不可欠である。『薫集類抄』には、本稿で小考を加えた「陽成院書」「薫炉方」「薫炉抄」以外にも、「雅忠朝臣勘文」や「知章朝臣口伝」、「和香方」といった、出典らしき名目が見える。これらについても稿を改めて小考を試みる予定である。

注

1 「香之書」は名古屋市蓬左文庫所蔵、一卷一軸、室町時代写、書写者未詳、包紙に外題「掛香之記」、請求記号162・14。本文と内容、伝来については近日発表予定の別稿「平忠盛家の薫物と『香之書』」(『文学・語学』掲載予定、号未定)で考察。

2 注1参照。

3 拙稿「恩頼堂文庫所蔵『薫集類抄』裏書勸物の翻刻と校異」、『広島女学院大学大学院言語文化論叢』8、平成17年3月

4 本稿で引用する『薫集類抄』テキストは本稿掲載の国立国会図書館所蔵本翻刻。

5 萩谷朴編著『平安朝歌合大成 増補新訂』1(同朋社出版、平成7年)に詳しい。

6 名古屋市蓬左文庫所蔵「焼物調合法(たきものちようほう)」(一軸、室町時代写、請求記号162・15)。当該箇所の釈文は次の通り。

陽成院

沈四両二分(マツ) 薫陸一分 甲香一分 丁子二両 麝香一分四朱 白檀一分

春加二日 夏六日 秋五日 冬十日

はるはむめのきのした秋はむまのくそのなかもしはきくのへんこれらにちはむのものにいれてうつむへしといへり

7 宮内庁書陵部所蔵「薫物方」(一冊、写本、請求記号266・118)、京都大学所蔵壬生家文書内「薫物方」(一冊、写本、請求記号た

3・1)。上記二本の奥書は左記の通り。丸括弧内は稿者記入。翻字中の文字は「□」と示す。

正和三年三月一日書写之記(花押)

延慶第三初秋上旬書写了

□房朝臣判

8 五日庚寅。銜後。大納言藤原実頼卿参入。着宜陽殿西廂座。有官奏之事。又昨日詔書加報。差案主史生送<sub>レ</sub>官。又自陽成院被<sub>レ</sub>奉入螺鈿大床子一脚。椅子一基。同螺鈿置物机二前等於内裏。自承和御時依<sub>レ</sub>為累代宝物所<sub>レ</sub>奉也。其使木工權助藤原元並也。有勅召<sub>二</sub>侍所<sub>一</sub>給御衣。退出。

(新訂増補国史大系9『本朝世紀』朱雀天皇天慶四年(941)十二月五日条、74頁)



9 「香字抄」、「香要抄」に関する主要参考文献は次の通り。

「香字抄」…新美寛「香字抄解説」（高山寺本解説、貴重図書影本刊行会、昭和11年）、岡井慎吉「香字抄解説」（猪熊本解説、貴重図書影本刊行会、同年）、川瀬一馬「増訂古辞書の研究」（雄松堂出版、昭和61年再版）、米山敬子「『香字抄』の引用書について——和書を中心にして——」（『和漢比較文学の周辺』、汲古書院、平成6年）、月本雅幸「香字抄解題」（『大東急記念文庫本解題、大東急記念文庫善本叢書13中古中世篇』、汲古書院、平成16年）

「香要抄」…渡辺幸三「香要抄解説」（『京都国立博物館監修「医学に関する古美術聚英」、便利堂、昭和30年』、森鹿三「解説」（天理図書館善本叢書31「香要抄」葉種抄）八木書店、昭和52年）、川瀬一馬「増訂古辞書の研究」（前掲）

10 注9記載の天理図書館善本叢書31「香要抄」葉種抄 香要抄 17頁影印を翻刻。

11 注9記載の天理図書館善本叢書31「香要抄」葉種抄 香要抄 130頁影印を翻刻。

12 貞丈按是ヨリ以下仮名書ノ文ハ皆山田尼ノ説ナルヘシ

13 「山田尼小一条皇后女山田中務後小一条通作者因幡守致貞女」…「薫集類抄」上97行。「因幡守致貞」は藤原基経公孫の従五位下因幡守致貞に比定される。『尊卑分脈』藤原基経公孫条に致貞女は「小一条院」（頭書「院、上及作者部類作皇后」）女房、後拾遺作者、山田中務」と見える。

14 注9記載の森鹿三「解題」（天理図書館善本叢書31「香要抄」葉種抄）所収に詳しい。

15 注9記載の天理図書館善本叢書31「香要抄」葉種抄 載録の「香要抄」本・鬱金香本文と同裏書勸物に使用される語句のうち、「熟鬱金」「黄鬱金」の影印を上下に並べて示す。

①「熟鬱金」



本文



裏書

## ②「黄爵金」



本文



裏書

16 「尊卑分脈」宇多源氏雅信公孫条参照。

17 源資通没年月日と享年について、「尊卑分脈」同右条は「康平三八廿三十六歳」と伝え、「公卿補任」同年条と「更級日記勸物」は享年「六十五歳」と作る。

18 医博士 権 殊撰其人器任之。如門生者不任之。但惟宗。俊通<sup>忠康</sup>、<sup>忠孝</sup>除之。兄弟相並例。<sup>忠康</sup>、<sup>忠孝</sup>重康。

侍医 権 又撰其人其器。門生任例。俊通。父子相並例。<sup>忠康</sup>、<sup>忠孝</sup>重康。

19 「帥記」「水左記」載録の主な当該箇所を左記に引用する。テキストは増補史料大成45「権記」二「帥記」(臨川書店、昭和41年)、同45「水左記 永昌記」(同、昭和40年)。

承暦四年閏八月五日

(前略) 次官問注王則貞事、左大弁定申可遣医人之趣、右衛門督定申不可遣由、左衛門督同左大弁、予定申云、件事旁依多疑、召上付送高麗国牒状本朝商客王則貞被覆問了、但大宰府解云、彼国伝聞大宰府有良医、可被渡送之由、所牒示也者、(中略) 若於可遣者、除上臈医之外可選遣一兩歟、独向異土可多心贅之故也、且又可被召問雅忠朝臣、又申請之後漸歷居諸、彼病若平癒者、奈渡遣何、仍今度大宰府送牒、被問彼病病体並癒否、重随申請可渡遣歟、両個之議可随敕定、(下略) (帥記)

同 十四日

(前略) 今日高麗国申医師事可令定申也、(中略) 可遣否、若可遣者誰人乎、又□□返牒其事條、右大弁以下□□之由、下官申云、医人條須差遣雅忠□也、然而遣之宗匠、朝之簡要也、遠遣異郷尤有□憚、忠康朝臣累代名家門業相伝、又俊

通朝臣□□道已為宿老、件兩人之間可差遣歟者、（下略）

〔水左記〕

同 二十二日

（前略）參陣之後、予參四條宮（割注・雖為御物忌、今朝渡坐云々）殿下宣云、自内被仰云、可遣高麗医事、如上達部定、為問雅忠遣召處、（中略）雅忠朝臣令申云、件事先例不候、今随付商客牒狀忽不可渡遣歟、猶可遣者俊通可罷向歟、又可罷向人不候之中、二人猶罷向者、俊通定致向背歟、是皆衆人所知也者、（下略）

（帥記）

20 神戸説話研究会編『続古事談注解』（和泉書院、平成6年）514、515頁。

21 前注『続古事談注解』516頁。

22 群書類從正編本を除く『蕉集類抄』諸本の下巻「煎甘葛」項「白石英方」に傍注「本草也」と見える。国立国会図書館本の本文については本稿22行目に、その他諸本は拙稿「西園寺文庫所蔵『蕉集類抄』翻刻と校異（下）」（広島女学院大学大学院言語文化論叢）8号、平成16年3月）20頁・脚注280参照。

23 注2に記載の拙稿34・35頁参照。